第１分科会（小学校）

分科会テーマ	通常学級における特別支援教育（通級指導教室を含む） ◎　特別な配慮を要する児童・生徒への支援の在り方
話題提供者 助　言　者	横山 貴志（三島市立錦田小学校）前任校：三島市立徳倉小学校 糠谷 章子（三島市立中郷小学校　教頭）

１　話題提供者より

発表テーマ「全ての子どもが自己肯定感を高め、共に学び合う通常学級での特別支援教育の充実」

（１）テーマ設定の理由

近年、子どもの特性が多様化し、通常学級の担任であっても、特別支援教育に対する知識や指導法を学んでおくことは、重要である。また、学校において、特別支援教育を推進するためには、教職員の連携が必要不可欠である。私は、学年主任、学級担任、特別支援教育コーディネーターとして学校運営に関わっている。全教職員をつなぐパイプ役として重要な立ち位置である。また、私は、前任の徳倉小学校に異動になる前に２年間、特別支援学級の担任をしており、知的障害特別支援学級、自閉症・情緒障害特別支援学級を１年間ずつ担任することができた。その中で、様々な特性や表れがある子どもたちと出会い、多くのことを経験することができた。そこで学んだことは、子どもたちの「自己肯定感」を高めることの大切さである。

自己肯定感を高めることで期待できる姿
①前向きになれる。
・失敗やミスをした時にも前向きな考えをもち、立ち直ることができる。
・前向きな気持ちになることで、チャレンジ精神をもつことができる。
②人との違いを受け入れ、他者に対して寛容になれる。
・自分自身を認めることで、他者も同じように受け入れることができる。
・他者との価値観の違いを肯定できるようになり、他者理解が進み、円滑な人間関係を築くことができる。

このように、自己肯定感を高めることで、一人一人が他者を受け入れ、共に学び合うことができるのではないかと考えたため、本テーマを設定した。

（２）実践内容

①障がいのある子にもない子にも分かりやすい学級作り

A児の実態
本児は、通常学級における特別支援教育の対象児童であった。そして、２年時、5月頃に医療にかかり、発達障害の可能性が高いと診断された。6月には、心理検査を実施し、7月に意見書をもらった。
・自閉症スペクトラム障害・ADHD（混合型）・発達性協調運動障害
（１年時）
他人に暴力を振るう行為が目立った。学習中も落ち着かないことが多く、集中できない場面が目立った。放課後児童クラブでも、問題行動が目立ち、担任がしばしば呼ばれていた。

（2年時）
休校期間中、母親が家庭で面倒を見ることが多かったが、学習への取り組み方などで、悩むことが多くなった。学校再開後、児童館の支援員に対する暴言や粗暴な態度をとる場面を、お迎えに来た母親が目撃することがあった。家庭でA児に関わることが多くなり、A児の実態を把握するようになった。そして、母親がA児と向き合うようになっていった。医療にもかかり、診断を受けた頃から、少しずつ落ち着いた生活をするようになり、問題行動も減少していった。

⇩ 3年当初の姿

・休み時間に友達とのトラブルが起こった時、話を聞いても自分のやったことを正しく振り返ったり認めたりすることができなかった。「どうせ」が口癖だった。
・「かく」（書く・描く）ことに抵抗を示し、学習に取り組めないことが多かった。
・本を読むことが好きで、読書の時は、静かにできる。

⇩ 3年時で目指す姿

・自分に自信をもち、友達のいいところを見つけ、円滑な人間関係を築く。
・国語科の漢字、図画工作科の絵画など苦手な学習にも取り組む。

⇩

A児を含めた環境整備を進めることができれば、A児も学級全体も落ち着いた学校生活を送ることができると考え、以下のような支援をしていった。

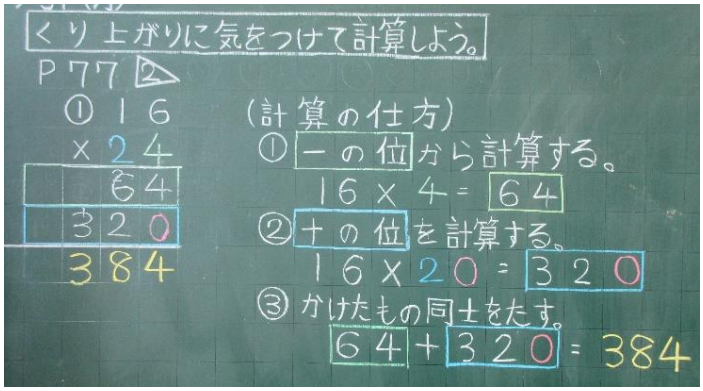
ア　視覚による支援の充実

・フローチャートなどのプログラミング教育を有効的に活用する。
・タブレットを活用する。
・板書を効果的、有効的に活用する。

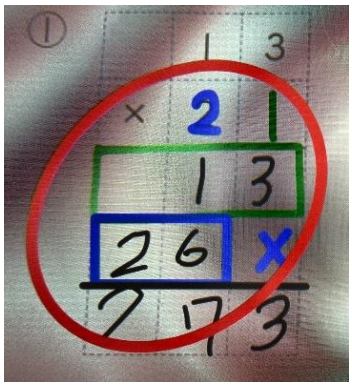
通常学級の中であっても言葉での指示では通りにくい子どもが一定数いることは以前から把握していた。そのため、目で見える形での支援を大切にして日々の教育活動を行ってきた。しかし、視覚支援をする中で、単純に指示や課題等を書くだけでは、活動できない子どももいた。一方、徳倉小学校では、三島市の研究指定でプログラミング教育の研修を進めてきた。プログラミング的思考の「順次処理」「繰り返し」「条件分岐」が有効的に活用できると考えた。指示や課題に番号をつけて順序を示したり、フローチャートを効果的に活用したりすることで、活動の順序が明確になり、より分かりやすくなった。どの子も何をすればよいか理解することができ、学習課題や作業への取り組みが早くなり、途中で何をすればよいか分からず、混乱する子どもも減ってきた。

学習活動においては、板書で蛍光の色チョークを用いて、分かりやすくす

ることを心掛けた。３年生「２桁をかけるかけ算の筆算」の学習では、かける数が２桁のため、筆算では２段必要になる。このことが複雑になり、子どもが混乱する原因になった。そのため、かける数を１桁ずつ色分けし、筆算の下に提示することにより、理解できるようにした。（資料１）また、タブレット端末を活用し、個別に支援することにより、一人ずつの定着度を把握し、確実な定着を図る手助けとなった。（資料２）板書とタブレット端末での提示の色を揃えることで、混乱を避けることもできた。



（資料１）板書による提示



（資料２）タブレット端末での提示

イ　話す時の工夫

・話す速さ（一文ずつ区切る）に注意する。
・文末まで言い切る。
・肯定的な言葉を使用する。

私は、元々話すスピードが速く、子どもたちにとって内容が伝わりにくいことがあった。初めて特別支援学級の担任をした時、子どもたちから「速くて何を言っているか分からない時がある。」と言われたことをきっかけに自分の話し方を振り返った。まずは、一文を短くすること、間を置くことに重点を置いた。常に意識することは、難しかったが、指導員に協力をお願いし、自分の話し方の課題を洗い出した。それと同時に、上記のような支援を行った。少し時間はかかったが、次第にゆっくり話すことを意識できるようになった。また、特別支援学級の他の担任の話し方も参考にしていった。その中で、「文末まではっきりと言い切ること」「否定的ではなく、肯定的に伝えること」の重要性を学んだ。こうした話し方を身に付けた結果、授業中は、子どもたちが安心して学習に取り組むようになってきた。

ウ　対人トラブル時の対応の工夫

・落ち着くまで待つ。
・話すのは１人だけにする。
・短く聞く。

学級という集団の中で生活していると、子ども同士のトラブルが発生する。話を聞く際には、相手が話している時は話さないことを徹底する。特に、特性をもっている子どもは、感情的になるとより混乱するからである。そして、

言葉を発しない時間を設けることで、クールダウンすることが期待できる。また、１つずつ確認するために、短く切ってお互いに話を聞くようにしている。状況や行動を１つずつ確認することにより、自分の思考を整理することができ、事実を正しく引き出すことができる。また、話が混乱しそうな時も、メモを見て、状況等を整理するようにした。

エ　一斉指導での個別支援の工夫

・個に合わせて、学習課題の量を調整する。
・やる気が持続するような課題を個に合わせて選び、提示する。
・小さいボードを持ち歩き、その場で頑張りを認めるコメントを書き、提示する。

学習活動を展開する中で得意・不得意があることは当然であり、積極的に取り組めるものと取り組めないものがあることも当然である。そのため、その子の実態に合った課題を出すように工夫した。そのため、机間支援を重視し、個別に対応し、その子の実態を的確に把握しながら、できることを提示することで意欲を引き出した。また、認める・褒めることも大切にした。しかし、学級という集団の中で、「なぜ、あの子だけ、そんなことで褒められる。」という声が出てしまうと、高まりかけていたその子の自己肯定感が否定されてしまうため、個別に褒める時は、ホワイトボードマーカーで書いてすぐに消すことができるメモ帳を用意し、そこに、コメントを書いて本人だけに見えるようにするなど工夫した。本人の成長が見られた時には、全体の前で褒めることも大切にした。また、タブレットの導入により、より個別に声かけや支援が容易になった。

オ　家庭との連携（学級便り・学習カード）

・UDフォントを使用する。（大きさ）
・学習内容を掲載する。（つまずきポイント、家庭での学習方法）
・毎日の2行日記に対するコメント（学習カード）

子どもの成長には、家庭との連携が必要である。そのためには、学校での様子を伝えることが重要であると考えた。学級便りでは、必要最低限の情報を掲載し、文字を大きくし、読みやすくすることを基本とした。学習での様子を伝えることだけでなく、子どもたちがつまずき易いポイントや十分に定着していない部分を的確に伝えることも意識した。このことにより、家庭学習での重点ポイントを伝え、効率よく学習を進めることができるようにした。

【Ａ児の変容】

・落ち着くまでの時間が短くなった。
・友達とのトラブルが減り、仲の良い友達が増えた。
・周りのことを気にかけられるようになった。
・学習への取り組みが早くなった。

３年時に担任した時は、生活面で人に迷惑をかけないことに重点を置くことにした。友達とトラブルになった時は、落ち着くまで待ち、話せるようになってから聞くことにした。また、本人なりの理由が必ずあるので、そこは共感し、行為自体を指導することを基本とした。この姿勢を大切にしたことで、次第に落ち着くまでの時間が短くなり、自分の行動や理由も正直に言えるようになってきた。また、１つずつしたことを確認することにより、自分の悪かった点を振り返ることができるようになっていった。さらに、話す時は、１人ずつを徹底したことにより、自分の主張をじっくり伝えることができるという安心感が生まれ、気持ちを素直に伝えることができるようになってきた。

３年生が始まったころの学習では、授業に集中できず、離席はなかったが、全く別のことをしていることが目立った。特に苦手意識の強い国語科の漢字の学習や図画工作科の絵画には、全く取り組むことができなかった。それでも、本人の気持ちを大切にして、許容し、本人のやる気が出るまで待ち続けた。声かけも最低限にし、「やれるとこまでは、やろう。」と声かけをしたり「どこまでならできる？」と本人の意思を尊重したりすることを大切にした。待つことを大切にすることにより、時間がかかってしまったが、生活面で落ち着いてきた頃に、学習に取り組む姿勢が少しずつ変わり始めた。国語科の漢字の書き取りでは、間違った漢字をなぞって直せるようにしてあっても取り組まなかったが、次第になぞるようになり、秋以降は、なぞらずにその近くに間違った字を自分で書くようになった。冬以降は、ノートを書くことも多くなり、３月には、丁寧に書く姿も見られるようになってきた。また、図画工作科では、声かけをしなくても、絵画の学習に取り組むようになり、自分なりの世界を絵に表現するようになった。

（成果）

・友達との良好な人間関係を築くことに重点を置くことで、Ａ児本人が落ち着いた生活をすることができるようになり、学級全体が安心して生活することができた。

・本人の意志を尊重することにより、自分も信じてもらえるという気持ちを高め、そのことが自己肯定感の高揚につながった。

（課題）

・本人の気持ち、意思を尊重することは重要なことであるが、時間がかかるとともに、うまくいかなかった場合、何も成長が見られない１年となってしまう危険性があるので、本人の特性や実態を的確に把握し、適切な支援をしていく必要がある。

②特別支援教育コーディネーターとしての実践

ア　障がいのあるＢ児への支援から

Ｂ児の実態

・自閉症スペクトラムの診断を受ける。（就学前）

・三島市療育支援室に通う。（就学前）

・新しい場面に対して、非常に不安と緊張を感じやすい。不安を感じると、動かなくなったり、パニックになったりする。

・苦手意識があるため、極度に怖がり、他の子どもと同じように取り組めないことがある。

・１年時より通級指導教室に通う。

進級時の引き継ぎ
・毎年4月の始業式前に、保護者と本人、新担任による事前面談を行っている。
・事前面談では、教室の位置、靴箱の位置も確認し、始業式当日、スムーズに過ごせるようにする。
・毎年、保護者より新担任へ4ページ程度のサポートブックが渡されるが、前担任から新担任へ事前に前年度の物を渡し、目を通してから面談に参加するようにしている。

○通級指導教室との連携

B児は1年時より、通級指導教室に通っている。通級指導教室では、B児が現在困っていることや不安に思っていることを円滑に引き出している。そのため、通級指導教室の担当と連絡を密にとることにより、B児が楽しく学校生活を送るために学校でやるべきことを明確にすることができる。

例えば、5年時の自然教室では、日程の確認だけでなく、就寝時の布団の敷き方と片付け方や飯盒炊爨での手順等を学校だけでなく、通級指導教室でも確認した。また、6年時の修学旅行でも同様に、宿泊施設に設置されているユニットバスの使い方を確認した。このように事前に練習することで、不安な気持ちを取り除き、本人が行事を楽しむことができ、円滑に日程を進めることができた。

B児の変容
・5年生、6年生と新しい活動が多くなり、不安な気持ちが大きくなりやすいが、事前指導を確実に行うことで、安心して行事や活動に取り組むようになった。
・自分の気持ちや状態を担任や周りの大人にすぐに伝えられるようになった。

イ　効果的・効率的なケース会議のもち方

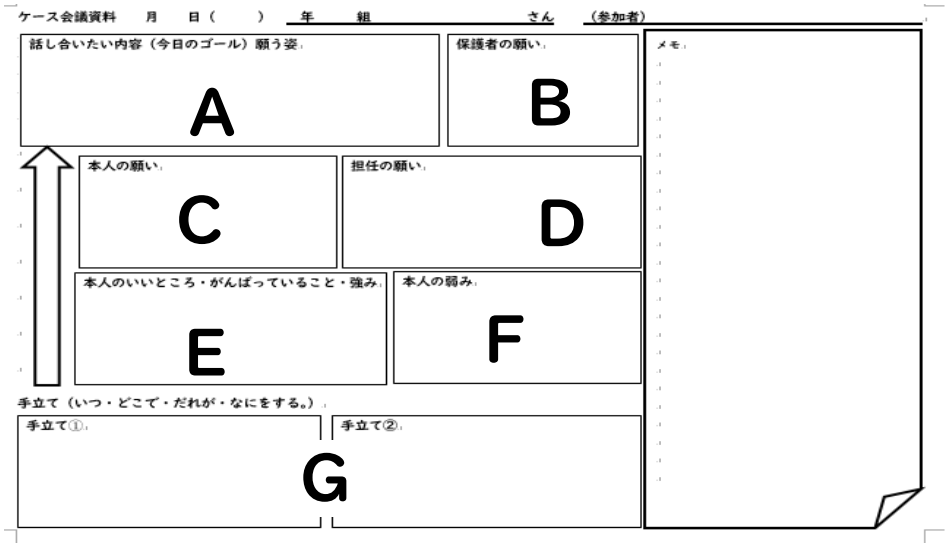
本校のケース会議の実態
・ケース会議の回数が多く、集中する時には、1週間に2～3回行われる。
・ケース会議の時間が長い。

⇩ 目指すケース会議のあり方

・短時間で効率よく進める。
→かかわり方、手立てを、明確にしていく。
・ケース会議時の役割を分担し、効率的な会議にする。
→担任一人が抱え込まないように組織的に行う。

ケース会議では、対象児童の実態、最近の様子などの報告から始まっていて、多くの時間がかかっていた。また、その後も話が突拍子もなくに変わることもあり、具体的な手立てを立てるまでに相当な時間を費やしていた。

そのため、以下のようなシートを用意し、話し合う順序も決めた。



Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆはケース会議前日までに担任に聞き取っておき、記入しておく。特に、Ａ話し合いたい内容を明確にしておくことで、話し合いの終了がわかりやすくなるという利点がある。また、Ｂ～Ｆも表にまとめて分類しておくことで、説明が単純化され、Ｇの手立てにスムーズに入ることができる。

このシートを導入した結果、２時間近くかかったこともあったケース会議も最短で３０分で収まるようになった。また、記録したシートを個別ファイルに綴じることによって、指導の蓄積もできた。

（成果）

・担任と通級担当との情報交換を積極的に行うことで、対象児童への適切なかかわり方、現在の気持ちや状況を的確に把握し、対象の子どもに適切な支援をすることができた。

（課題）

・ケース会議の方法を改善したが、まだまだ始めたばかりであるため、継続化することで、より効果的なケース会議を行うことができる。

（３）まとめ

子どもたちの自己肯定感を高め、自信をつけることができるようにすることで、子どもたちは、大きく成長する。配慮が必要な子どもたちだけでなく、学級にいる全ての子どもたちに、分かりやすい学級の雰囲気をつくることで、安心して学校生活を送ることができるようにすることが重要である。

自己肯定感が高まり、自分に自信をもった子どもたちは、生活面だけでなく、学習面でも大きく伸びる。これからも、子どもたちの無限の可能性を伸ばしていくために、子どもたちの自己肯定感を高めることを大切にしていきたい。

２　助言者より

直近の 10 年間で、義務教育段階の児童生徒数が減少になっている一方、特別支援学級に在籍する児童は 2.1 倍、通級による指導を受けている子どもの数は２倍に増加しているという文部科学省の報告があります。この報告から、通常学級における特別な配慮・支援を要する子どもの数も増加していると思われます。そこで、通常の学級においても発達障害を含む障害のある子どもがいることを前提に、全ての教職員が特別支援教育の目的や意義について理解することが重要です。また、教科等においては、きめ細やかな指導・支援を行い、各教科等の学びを充実させるよう、困難さに対する指導・支援の工夫、手立てを実践していくことが大切です。

本発表は、小学校の通常学級における特別支援教育の充実の実践であり、発表者は全ての子どもを対象に「自己肯定感を高める」という熱い思いをもった実践でした。実践発表の内容から、ポイントとなることを述べていきたいと思います。

(1)　支援体制の整備　【特別支援教育コーディネーターの役割について】

各学校では、校内委員会を設置して、特別支援教育コーディネーターが指名され、校務分掌に位置づけられています。特別支援教育コーディネーターは、学校全体の特別支援教育の体制を充実させ、効果的な運営に努めます。発表では特別な支援を要する子供に対する配慮や手立てについて共通理解をし、各教職員間が連携を取れるよう、ケース会議を適切に開いていました。また、ケース会議では、必要な情報を収集・整理しやすくした学校独自のシートを活用し、会議をマネジメントしていました。さらに、通級による指導を受けている子どもにおいては、通級指導教室担当教員から個への支援や保護者の願い等の情報を得て、会議内で共有し、これらの情報が各教科等と通級による指導との関連を図ることになり、効果的な指導につながっていました。ケース会議で話し合われ、保護者との合意形成がされた場合は、合理的配慮として「個別の指導計画」に明記し、PDCA サイクルによる計画的な指導とその評価と改善を繰り返すことで指導内容を充実させることにつながっていきます。卒業にあたり、中学校への確実な引き継ぎも大切になります。

(2)　多様な学びの場の環境整備　【ユニバーサルデザイン化された学級運営】

学級担任が、学級の子どもたちの実態把握を丁寧に行ったうえで、視覚支援を学習活動のみならず指示や活動の中で意図的に行ったり、困難さに対する支援を個別に行ったりすることで、子どもの生活上・学習上の困難さの軽減を図っていました。他にも、話すときの工夫や対人関係トラブルの対応の工夫、「振り返り」の時間の確保を設ける等の実践が、個々の子どもたちの力を発揮できる基盤となっていました。さらに、発表者が ICT の利活用を積極的に進めたことで、学習における個への指導・支援が特別支援教育の質の向上につながっていると感じました。

職員室で肯定的に子どもを捉え、指導の手立てを共に考えていける職場環境になることが、特別支援教育を推し進める一歩になると思います。

助言者　糠谷章子（三島市立中郷小学校　教頭）